

32. ワークショップ

生活科や「総合的な学習」の学習の成果を発表する形態の一つと考えてよいでしょう。同会場に散らばって、様々な発表が同時になされるという点に於いては、ポスターセッションと同様です。ただし、それぞれのコーナーでの発表は学習の成果としての情報に限らず、作品であったり、実演であったりとさらにバリエーションに富み、聞き手側が参加するということに特色があります。

ワークショップとは

ももとは仕事場とか作業場とかいう意味である。国語大辞典（学研）によると、「あるテーマについて、主として実地の応用を交えながら、参加者が意見の交換をしたり、技術などの紹介をしたりする研究会。」とある。ここでもやはり、発表者の一方的な情報提供と言うよりは、参加型・体験型の発表形態であることが読みとれる。

—— 実践するにあたって ——

ポスターセッションの項で解説したように、生活科の実践の中で「ポスターセッション」と解説されているものは、ほとんどこの「ワークショップ形式」と考えてよいと思います。「ポスター」の名残として、短時間のPRタイムを設ける場合もありますが、発表の内容としては参加型・体験型が主流で、発表というよりも、様々なコーナーに分かれての対面交流活動といってよいでしょう。そうすると、発表形態という範囲を越えて、活動形態と言ってもよいように感じます。子供広場に下学年を招待する、学年でオリエンテーリング的に楽しむ集会、児童会で企画する校内オリエンテーリング集会などもこの範疇と言えます。

ここで留意したいことは、発表内容（活動内容）の面白さが参加者によって選ばれるということです。どのコーナーにも最低限、発表者が満足できる程度の参加者は必要です。参加者の人数を増やしたり、PR活動を奨励したり…。いずれにしても、まだまだ思うように話したり伝えたり出来ない低学年ですから、支援者の配慮が必要です。また、参加者側にも全部のコーナーを回ってみる、表面上の魅力で判断しないという指導が必要です。

一歩進んで、参加すると同時に評価に生かしていくということも可能です。発表でも交流でもなく、相互評価の場としても活用できそうです。